

## 第9班

### 『日本近世生活絵引 南九州編』 編纂共同研究

#### (1) 共同研究員名

研究代表者：小熊誠

共同研究員：駒走昭二 渡辺美季 富澤達三

研究協力者：得能壽美 小島摩文 上原兼善 橋口亘

#### (2) 研究目的

2013年度までに研究をまとめた『日本近世生活絵引奄美・沖縄編』では、「南島雑話」以前の近世奄美の習俗を描いた絵巻「琉球島真景」を取り上げた。奄美の習俗を見ると、琉球のものと薩摩のものがそれぞれ影響を与えていることがわかった。その関連で、薩摩を中心とした南九州地域における風俗絵図を研究する必要があると判断し、今期ではその絵引を作成する。

#### (3) 活動経過

- ① 第1回研究会は2015年4月11日に非文字資料研究センターにて開催された。初回研究会であったため、まず絵引編纂プロジェクトのこれまでの歩み、および南九州地域の絵引編纂開始にいたる経緯などを確認した。その上で絵引の対象となる絵図を検討し、熟議の末、その希少性や完成度などから東京大学史料編纂所蔵「薩藩勝景百図」（全5巻、102景、1815年）[国宝]を取り上げることに決まった。但し藩の編纂物であり風景を主題とした百図では、人々の生活が十分にはすくい取れないため、それらを補うものとして「倭文麻環」・「鹿児島ぶり」・「薩摩風土記」などの書物に収録された絵図も検討した。だが、これらを絵引とするかどうかは結論が出ず、引き続き議論していくこととした。
- ② 第2回研究会は2016年2月22日に非文字資料研究センターにて開催された。すでに第1回研究会にて班員に配付した「薩藩勝景百図」のコピー図をもとに、どの景を絵引として取り上げるかを検討し、最終的に36景を選んだ。さらに各景の絵引の作成分担も決定した。また研究会の議論において、「百図は重要だが、そこからは読み取れない情報も多いので、それ以外の絵図も絵引化すべきだ」との意見が多く出され、その候補として「自御牧内馬追図」（伊作牧の馬追いの絵巻物）などの検討を行ったが結論が出ず、議論を継続することが確認された。
- ③ 第3回研究会は2016年9月4-5日に、非文字資料研究センターにて開催された。「薩藩勝景百図」の36景について、第2回研究会で決めた分担による各景の絵引作成担当者が、エクセルシートにて作成した下案を持ち寄った。その内容を「薩藩名勝志」・「三国名勝図会」等の関連する史料

群を参照しつつ、検討する作業を行った。研究会での議論を受け、各自が次回研究会までに、それぞれの担当する景の絵引を加筆修正し、完成度をより高めてくることが確認された。その他の絵図候補として「倭文麻環」の諸写本の検討を行ったが結論が出ず、引き続き議論していくこととした。

- ④ 第4回研究会は、2017年3月6-7日に行った。まず3月6日には、非文字資料研究センターにおいて、「薩藩勝景百図」の絵引下案の二度目の内容検討会を行い、またその他の絵引候補や解題・参考図版などについても話し合った。翌7日には、東京大学史料編纂所において「薩藩勝景百図」を調査し、肉眼で直接観察することで絵図の詳細な部分の確認と検討を行った。その結果を受け、各自が今年度末を目途にそれぞれの担当する景の絵引の最終稿を作成する予定である。

#### (4) 研究成果

二年間という短い期間であったが、これまで詳細に検討されたことのない「薩藩勝景百図」の詳細な分析を主軸に、百図と密接な関係にある薩摩藩編纂の地誌類および人々の生活をより活写する（百図の不足を補うような）絵図類の分析をもう一つの軸として、南九州の生活文化や絵図に関する研究を進め、近世期の薩摩を中心とした南九州地域の絵引が完成しつつある。次年度は、第三期の成果を発展的に継続することを目的とした第四期が始動するが、それを相補い併走する形で、第三期の成果報告書（南九州絵引）を編集・刊行し、さらに公開報告会も開催する予定である。

#### (5) 今後の課題と展望

南九州地域には、「薩藩勝景百図」をはじめとした公的地誌類や様々な書籍の「挿絵」として当地の生活文化を描くものは多いが、「庶民の生活そのものを主題とした近世の絵図」は意外なほど見当たらない。第二期『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』を発展的に継承すべく、第三期のテーマに南九州を選んだが、南九州に関して奄美・沖縄編で扱ったような性質の絵図類は見出すことができなかった。そのような絵図が見当たらない以上、それが南九州地域の絵図文化であると受け止め、他の絵図類（それはそれで極めて興味深い内容である）から可能な限りの生活文化を見出すべく最善を尽くしたが、それでも当初想定していたような形では第二期の研究蓄積を活かし切れなかった。この点を克服しつつ、奄美・沖縄編（第二期）と南九州編（第三期）双方の研究蓄積を活かす一つの方策として、次の第四期では両編に関わるような「行列」が往来する生活空間に着目しての絵引研究を予定している。第四期の研究が第二期・三期を横断的に結び付ける形で展開し、絵引の共同研究が深まることを期待したい。